タイトル：会社考

会社はなぜ「会社」という字で、「会衆」や「公司」ではないのだろう。いつの頃からか気になり始めた疑問である。

漢字は中国で生まれ、その歴史は数千年に及ぶ。古い字の大半は草や木・虫・●といった自然の象形から生まれている。その後、新たな文字が生まれ続け、異質な文明に出会う都度、新たな語が生じ、現在に至っている。

奈良時代、中国に触れた日本は漢字をそのまま取り入れ、日本語に同化したが、明治時代、日本は西洋に触れ、それまで知らなかった物や概念を手持ちの文字で理解しようと試みた。英語を同化しつつある現在は、奈良時代に近いのかもしれない。この時代の訳には驚くような名訳がいくつもある。

informationを「情報」＝「情けに報いる」と訳したものなどはその代表といえよう。他にもnewspaperは「新聞」＝「新たに聞く」、scienceは「科学」＝「科（計量し分類する）学問」等。目に見えない考え方や組織に関連する訳には訳者の本質に迫る考え方が反映されているように思われ、興味がつきない。

そんな名訳の中で、昔から気になっている言葉がいくつかある。会社、社会、経営といった言葉である。ほとんどの人が当たり前のように使っている言葉だが、なぜそのような字なのか意外とわからない。ある日、気になって神田の古本屋街で漢辞典の類を漁ってみたのだが、漢字のプロは中国の歴史のプロであって、実務の中で生まれた明治以降のこれらの言葉の成り立ちはよくわからなかった。

日本に会社らしきものができたのは、坂本龍馬の亀山社中が最初だといわれている。

「社」という字は示＝神と土＝土地から成り、神社に代表される使われ方でもわかるように、土地の神様の意を持つ。転じて、永続的な「共有される価値観」、「運命共同体」を軸とした組織を指すと言われている。「亀山社中」を作った際、龍馬の頭には「社で結びついた仲間」という感覚があったのではなかろうか。その後亀山社中自体は、海援隊に変化した。より目的志向の「隊」になり「価値観を共有する社」から「ある目的を成し遂げる隊」になったとも言えよう。

その後、20年程の間にcompanyの訳として「会社」が生じる。「会して結んだ社」（会社は作るものでなく結ぶものだったとされる）には（明治期には会社の多くが、無限責任社員からなる「合名会社」だったことを考えると）運命共同体である組織としての「会社」が垣間見える。「草冠＝米」や「さんずい＝水」の「番＝管理」をする藩から、天皇を軸とした宗教的な「価値の共有」に転換した明治なればこそとも言えよう。

辞典によると「Company」の「商社」「会社」の意味の語源はイタリア語であるとされている。

中世イタリアは海上交易の要であり、日本で言えば戦国時代の堺のような海上商業共和国が勢力を持っていたといわれる。代表がフィレンツェでありベネツィアである。当時の代表的な商社の形態は「コンメンダ」と呼ばれ、一往復の航海毎に結ばれる提携で、片方の商人は故国を動かず資本を供給し、他方は海外で事業を行った（利益は前者3、後者1、損失は前者が有限責任、後者は無限責任）。これに対し、トスカーナ地方の商社は「コンパニーア」と呼ばれ、共同経営者の双方が資本と経営を受け持ち、第三者に対するどち

らの借金にも責任を持つ組織だったとある。

この「コンパニーア」は、もともと父と息子、数人の兄弟といった小規模の家族、つまり同じパン（コン＝同じ、パーニュ＝パン）を分け合う者から成る運命共同体として営まれていたようである。従って、コンパーニュ（共同経営者）は共通の利害を持ち、相互の行動に無制限の責任を持つことを当然とみなす関係だったようだ。（『プラートの商人』イリス・オリーゴ著）

今でいう印僑や華僑に近い組織と言っていいだろう。ここまで来ると、この「コンパニーア」が「社中」になって不思議はない。Co., Ltd.のLtd（Limited）は責任範囲の有限性をわざわざ定義しているわけだろう。

日本がグローバルスタンダードの中に位置づけられる必要が高まるにつれ、我々の周辺でも、海外の企業との提携の話題が多くなってきた。「アライアンス」の際には、是々非々のビジネスライクな議論になるが、「カンパニー」「パートナーシップ」になると、「共有の理念」や「パートナーとしてふさわしいか」が議論となる。最近増えているLLC（リミテッド　ライビリティ　カンパニー）などは、有限リスクではあるがカンパニーである（従って無限責任のパートナーとしての参加が期待される）と言っているように思える。いわゆるグローバルスタンダードを決めている米国の金融や情報のトッププレーヤーたちはかなり狭い世界で、この「パートナーシップ」を作っているような気がしてならない。

日本と中国は、漢字という共通文字を持つ。日本語の多くの語は中国から伝わり、一部の語は日本から中国に伝わった。中国ではCompanyは多分に官僚的なにおいがする公司と訳されている。電脳という名訳を行った現代中国がCompanyを公司と訳したとすれば、語源の持つ本質でなく、世にたくさんある会社を訳したように思われる。

一方、日本の「会社」の多くが「公司」になってしまった感も強い。古来、商人の活躍する時代は、空間的、時間的に格差が大きくなり、かつ、相互の交流が可能になった時代である。今の世界がまさにその時代だろう。こんな時代を切り開くことのできる組織は、価値を共有する「社」であって、烏合の「衆」ではないだろう。これからの日本に必要なのは「公司」に近い「会社」ではなく、本来的な意味での「価値を共有する同志としての」「会社」であるように思われてならない。

（1997年）